

六種本尊と「音声に住する禪定 [の念誦]」

田村 宗英

《抄録》

本稿では、筆者が研究を続けている *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* の Buddhaguhyā 注とイエーシェードルジェー注に出てくる「六種本尊 (lha drug)」と「音声に住する禪定 [の念誦] (sgra la gnas pa'i bsan gtan [gyi sngags bzlos pa])」を中心に考察を進めた。「六種本尊」とは、所作タントラにおける親近行のうち我生起にあたるものである。念誦の正行(正念誦)に先立って行われるもので、ツォンカパやケートゥップジェは「五相成身観」の代替であるとし、重要視している。六種本尊との関連で登場する語としては「音声に住する禪定」がある。また「音声に住する禪定」には二種類の念誦法があり、それについても考察を試みた。「音声に住する禪定」とその二種類の念誦法についての解釈から、イエーシェードルジェーと後代のツォンカパらでは捉え方に違いがあったとみられる。時代だけではなく流派による伝承に違いがあったとも考えられ、引き続き考察していきたい。

0. はじめに

今回取り上げるのは、筆者が研究を続けている *Vajravidāraṇa-dhāraṇī*¹ の Buddhaguhyā 注 (Toh2680, Ota3504) とイエーシェードルジェー² 注 (Toh.2687, Ota.3511) に出てくる「六種本尊 (lha drug)」と「音声に住する禪定 [の念誦] (sgra

1 *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* (Toh.750=949 / Ota.406=574) については筆者のこれまでの論考で度々言及しているが、理解の便を図る上で、簡単にまとめておきたい。

2 これまでの研究成果から *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* の成立年代は、7世紀末～8世紀頃と目される。人々の罪障を浄化する功德が大きい陀羅尼として篤い信仰を集めていると共に、現代では山や川などの浄化、日本でいうところの地鎮法や地鎮祭にあたる儀礼を執行する際にも用いられている。文献上の位置については、Padmasambhava や Buddhaguhyā の注釈から所作タントラであり、『プトゥン仏教史』(Toh 蔵外 5197)・第4章「目録部」に従うと、所作タントラのうちの金剛手タントラ(金剛部)に属するものである。陀羅尼の内容については、金剛手が仏の不可思議な力(加持)をうけ、忿怒金剛手となって説いているものである。「一切の有情

la gnas pa'i bsan gtan [gyi sngags bzlos pa])」についてである。田村 [2020b] においては、六種本尊を列挙して紹介したが、六種本尊と密接な関係にある「音声に住する禅定 [の念誦]」について触れることができなかつたため、今回はこれを中心に考察を進めていきたい。また、関連して「ささやき (小声)」、「金剛のことは (金剛語)」という二種類の念誦法についても併せてみていきたい。

1. 六種本尊の概要³

「六種本尊」とは、所作タントラにおける親近行のうち我生起にあたるものである。念誦の正行 (正念誦) に先立って行われるもので、ツォンカパやケートウップジェは「五相成身観」の代替であるとし、重要視している。しかしながら、「六種本尊」について詳細な研究はこれまでになされておらず、どのような経緯で成立したものか不明な点も多い。

また、現在確認できる「六種本尊」が登場する一番古い用例としては、Buddhaguhya の記述から *Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* の広本たる『金剛須弥山頂のタントラ』の一節である。

六種本尊の各項目については、Buddhaguhya とイエーシェードルジェー、ならびに後代のツォンカパ⁴ やケートウップジェがまとめているものを示すと以下の通りとなる。

【Buddhaguhya】

・ *Ārya-vajravīdāraṇa-nāma-dhāraṇītkā-ratnābhāsvarā-nāma*

(*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* の注釈: Toh2680, Ota3504)

空 (stong) ・ 文字 (yi ge) ・ 音声 (sgra) ・ 色 (gzugs) ・ 印 (phyag rgya) ・ 相 (mtshan ma)

を恐れさせる」、「停止させる」、「惑乱させる」など荒々しい内容が中心となっており、最後に陀羅尼の功德を偈の形で説いている。

3 詳しくは、田村 2020b を参照のこと。

4 ツォンカパは『大真言道菩提論』(Toh.5281,Ota.6210)の第二品において所作タントラの道次第を説いており、主に Buddhaguhya の『上禪定品』(Toh.808)、『上禪定品広釈』(Toh.2670)ならびに Varabodhi の『蘇悉地經成就法略本』(Toh.3066)を典拠としている。概ね、Varabodhi の説に則り解説を施しているようであるが、六種本尊の解説にあたっては Buddhaguhya の『上禪定品』、『上禪定品広釈』からの引用が多くみられる。そのため、Buddhaguhya の説を補うものとして参照した。

・『上禪定品広釈』(Toh.2670)

菩提心の相である不二の三昧 (byang cub kyi sems kyi mtshan nyid gnyis su med pa'i ting nge 'dzin)、音声 (sgra)、文字 (yi ge)、印 (phyag rgya)、色 (gzugs)、世俗の有相の三昧 (kun rdzob kyi ting nge 'dzin rnam pa dang bcas pa'i bye brag)

【イエーシェードルジェー】(Toh.2687,Ota.3511)

無分別 (rnam par mi rtog pa)・音声 (sgra)・文字 (yi ge)・陀羅尼 (gzungs)・印 (phyag rgya)・三昧 (ting nge 'dzin)

【ツォンカパ、ケートウツプジェ】(Toh.5281,Ota.6210,IBTS)

勝義・真実 (de kho na nyid kyi lha, ツォンカパ don dam pa'i lha)・音声 (sgra)・文字 (yi ge)・色 (gzugs)・印 (phyag rgya)・相 (mtshan ma)

これら「六種本尊」を順に修習し、自分自身を本尊として立ち上げるのである。イエーシェードルジェーの説を例にとると、最初に「無分別の本尊」を修習し、音声—文字—陀羅尼—印—三昧の本尊という段階を経て自分自身を本尊として立ち上げる。しかし、順番については諸説あったとみられ、イエーシェードルジェーは別な順序も示している⁵。

2. 音声に住する禪定 [の念誦] について

六種本尊との関連で登場する語として「音声に住する禪定 (sgra la gnas pa'i bsan gtan)」が挙げられる。Buddhaguhya 注においては以下のように言及されている。

法そのものであり空の本尊などである甚深なる六種 (=六種本尊)、それは仏の御体であって [仏の] 活動領域に生まれることでもある。それゆえ、親近 [行の中でも] 音声に住する禪定の念誦も理解すべきである。
(Toh.2680,185a3-4 / Ota.3504,191a6-7)

5 Toh.2687,252a3-6

つまり、「六種本尊」が親近行の中でも特に「音声に住する禪定の念誦 (sgra la gnas pa'i bsaṃ gtan gyi sngags bzlos pa)」に深く関連しており、併せて理解しなくてはならないと読み取れる。しかし、本注釈内で Buddhaguhyā は「音声に住する禪定の念誦」また「六種本尊」についてこれ以上の言及をしていない。そのため、田村 [2020b] においては、Buddhaguhyā の説を補うものとして、ツォンカパとケートゥップジェに拠りながら考察をした。Buddhaguhyā のいう「音声に住する禪定の念誦」は、ツォンカパの「念誦を伴う禪定 (bzlas brjod dang bcas pa'i bsaṃ gtan= 四支念誦)」を指しているものと考え、六種本尊は四支念誦の正行 (正念誦) に先立って実修されるものと述べた。また、イェーシェードルジェの説についても、六種本尊の後に三または四支念誦を実践する旨が説かれていることや、Buddhaguhyā のいう「音声に住する禪定の念誦」についても注釈内で「音声に住する禪定 (sgra la gnas pa'i bsaṃ gtan)」と省略した形で登場することから同じ傾向にあるのではないかと推測し、あまり問題視していなかった。しかし、その後考察を進める中で、Buddhaguhyā のいう「音声に住する禪定の念誦」の捉え方がイェーシェードルジェと後代のツォンカパらとでは違うのではないかと思ひ至り、改めて考察を試みたい。

2.1 イェーシェードルジェの説

まずイェーシェードルジェからみていくと、我生起である六種本尊を説いた後、楼阁を生起し智薩埵を勧請して供養を捧げること等が説かれる。その後、「音声に住する禪定」について断続的に述べられる。便宜上、番号を付して目ぼしい箇所を挙げると次の通りである。

- ① de nas bzlas pa byas te / dsnyen pa'i dus su sgra la gnas pa'i bsaṃ gtan bya'o //
sgrub pa'i dus su bzias brjod dmigs pa gsum dang / yan lag bzhis bya'o //
(Toh.2687,253a5-6)

それから念誦をなす [際]、親近行の時に「音声に住する禪定」を行う。
実修の時に念誦は三もしくは四支に意識を向けて行う。

- ② sgra la gnas pa'i bsaṃ gtan bya bar 'dod na / bsaṃ gtan phyi ma las kyang /

gsang sngags la gnas dngos grub ster // sgra gnas rnal 'byor ster bar dran // sgra
 mthar thar pa ster ban yid // 'di dag de nyid gsum pa yin // zhes gsung so //
 sgra la gnas pa'i bsam gtan ni / btag nyit lhar bskyed pa mi dmigs par dsams la
 bde ba'i rjes la / bdag nyid kyi sems stong pa nyid kyi ngang las / nam mkha'
 las zla ba'i dkyil 'khor gyi steng na / gzungs sngags la sogs pa dkar sha (shar?)
 re yod par bsams la / yi ge de'i 'od zer me 'bar bai ta bur bsams te / phyi nas de
 tsho yang mi dmigs par bsams la / bdag nyid kyi sems na mo ratna tra yāya by
 aba nas / a mṛ te hūm phaṭ bya ba'i bar du yi ge'i rang sgra sgrogs pa de yang
 dper na dril bu'i sgra dang 'dra bar rgyun mi 'chad par bdag nyid kyi sems sgra
 spyi yi rnam par grag par bsam mo // de ni sgra la gnas pa'i bsam gtan no /
 (Toh.2687,266b4-267a1)

「音声に住する禪定」を實踐したいと欲するならば、『上禪定品』から「真言に住して悉地を授かる⁶、音声に住して瑜伽を授かると思え、音声を完成することは解脱を授かることに他ならない、これらは三つ[の真実]である」とおっしゃっている。

「音声に住する禪定」というのは、自分自身を本尊として生起し、認識作用の対象となるものをもたずに（無所縁の）観想することにおける樂を伴って、自身の心は空性の本質そのものであることから、虚空における月輪の上に、陀羅尼などが白く輝く[様相]であると観想し、その文字の光は炎が燃え立つようであると観想する。後にそれらもまた無所縁であると観想する。

自分自身の心[月輪]に「namo ratnatryāya~amṛte hūm phaṭ⁷」までの文字そのものが音声を出しており、それも例えば、鈴の音のように絶え間なく、自分自身の心は音声の総体としてのあらわれであると観想する。これが「音声に住する禪定」である。

③ de mi byed na dmigs pa gsum gyis bya ba 'am / yan lag bzhis bya ste / dmigs pa

6 『上禪定品』(Toh.808,224a6)では、gsang sngags me gnas dngos grub ste…(真言の火に住し悉地を[授かる])となっている。

7 *Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* (Toh.750) 所収の陀羅尼全文を指している。

gsum ni / sgra dang sems dang gzhi la gzhol // gsang sngas yi ge bzhi la gnas // zhes bsam gtan phyi malas gsungs so// gsang sngags kyi yi ge dang // de'i gdan zla ba'i dkyir 'khor dang / de bzhin gshegs pa'i sku'o // yan lag bzhi ni / bcom ldan 'das bum pa'i nang na bzhugs pa dang / bdag nyid lha rub skyed pa dang / de gnyis kyi thugs ka na zla ba'i dkyir 'khor re re yod pa dang / de'i steng na gzungs rings sam / yang snying ngam / rigs kyi snying po gang rung gnas par bsam mo / (Toh.2687, 267a1-3)

これ（音声に住する禪定）を実践しないならば、三つ〔のもの〕を認識対象（所縁）とすることによって実践するか、四つの支分（四支）によって実践すべきである。

三つ〔のもの〕を認識対象（所縁）とするというのは、「音声と心と基体に集中する。真言と文字と基体⁸に住する」と『後禪定品』（Toh.808,224a3-4）で述べられている〔ことによる〕。

〔つまり三つというのは〕真言の文字とその御座である月輪と善逝の御体である。

はじめに色を認識対象（所縁）とし、それから月輪を認識対象（所縁）とし、それから世尊を認識対象（所縁）とする。

四つの支分というのは、世尊が瓶の中にいらっしゃり、また自身を尊格として生起し、その二つの胸に月輪がそれぞれ存在し、その上に陀羅尼もしくは心真言（心呪）もしくは明呪の心真言（心呪）いずれかがあると観想する。

②では、Buddhaguhyā の『上禪定品』（Toh.808,224a6-7）を典拠として挙げており、ここでの「音声に住して瑜伽を授かる（sgra gnas mal 'byor ster bar dran）」という箇所を「音声に住する禪定」と同じものとして扱っているようである。引き続き「音声に住する禪定」についての自説を具体的に示しており「自分自身の心が音声の総体としてのあらわれであると観想する」と述べている。

また、①と③には三もしくは四支について説かれている。①を読む限り「音声

8 『上禪定品』（Toh.808,224a3）では、gsang sngas mi 'gyur gzhi…（真言の変化しない基体）となっている。

に住する禪定」は三または四支念誦のことを指しているように見える。続いて③では、「音声に住する禪定」を実践しないときは、三もしくは四支を認識対象（所縁）とした念誦の実践を勧めている。③のこの時点では「念誦」などの用語は出てきていないのであるが、後に「念誦法については二つあり、‘金剛のことは（金剛語）’‘ささやき（小声）’の方法で、遅すぎず、速すぎず、真言の文字を唱えて念誦を実践せよ」（Toh.2687, 267a5）と述べられていることから、ここも念誦に関連する箇所だと判断される。また、ここでの「金剛のことは（金剛語）」と「ささやき（小声）」の念誦法については後に検討したい。

「三もしくは四支」については、一部本文とは違う箇所もあるが、『後禪定品』（Toh.808,224a3-4）から引用している。三支については1. 真言の文字、2. [心] 月輪、3. 善逝の御体、としており、これら三支を認識対象として念誦を实践すべきことが説かれているが、順序として「はじめに色を認識対象（所縁）とし、次に月輪―世尊、としている。ここでの「色」を先の三支と対応させるならば、真言の文字の「色」ということになり、真言の文字の「色」－[心] 月輪―世尊（善逝）の御体を順に所縁として修習する流れとなるであろう。

四支について、ここでは瓶生起の表現を用いているようだが、1. 世尊（本尊）、2. 自身、3. [心] 月輪、4. 陀羅尼（真言、心真言）が挙げられている。『上禪定品』（Toh.808,224a3-4）の当該箇所を引用していることから、『上禪定品広釈』（Toh.2670,15a6-7）で「音声とは真言の文字である。心とは、真言の基体であり、[心] 月輪の相となるものである。基体とは、如来の御体の自性である。第二の基体は、自身の本尊の姿である」と言及している箇所に基づくとみられる。つまり、基体を二つに開いているわけであるが、これに対応させると以下の通りとなる⁹。

- | | | |
|----|----------------|-------|
| 基体 | 1. 世尊（本尊） | 2. 自身 |
| 心 | 3. [心] 月輪 | |
| 音声 | 4. 陀羅尼（真言、心真言） | |

9 ツォンカパも『上禪定品』（Toh.808,224a3-4）を引いているが、『上禪定品広釈』（Toh.2670,15a6-7）の当該箇所ではなく、『大日経』『世間成就品』などを引用をして解説している（『大真言道菩提論』（Ota.6210,41a4-41b6））。端的にはケートウツプジェがIBTS（p.186）でまとめている。

さらに③では、「これ（音声に住する禪定）を実践しないならば」と述べて、三支もしくは四支念誦についての解説がなされている。この記述からイエーシェードルジェーは、「音声に住する禪定」と三支もしくは四支念誦について、同じ枠組みにあって関連しているものではあるが、別個に実践しても良い念誦法であると判断しているのではないかと考えられる。

2.2 ツォンカパ、ケートウツプジェの説

できるならばイエーシェードルジェーとツォンカパらの時代間を埋めるテキストを見つけ比較検討をしたかったが、現時点で「六種本尊」や「音声に住する禪定 [の念誦]」の両方が出てくるテキストを見出すことができなかった。また、注4でも述べた通り、ツォンカパは『大真言道菩提論』(Toh.5281,Ota.6210)の第二品において所作タントラの道次第を説いており、主に Buddhaguhyā の『上禪定品』(Toh.808)、『上禪定品広釈』(Toh.2670)ならびに Varabodhi の『蘇悉地経成就法略本』(Toh.3066,Ota.3890)を典拠としている。概ね、Varabodhi の説に則り解説を施しているようであるが、六種本尊の解説にあたっては Buddhaguhyā の『上禪定品』、『上禪定品広釈』からの引用が多くみられる。そのため、Buddhaguhyā の説を補うものとして参照したい。

ツォンカパらについては、田村 [2020b] で「念誦を伴う禪定（四支念誦）」＝「音声に住する禪定の念誦」であると示したが、ここで訂正しておきたい。あくまでツォンカパらの説によれば、六種本尊で自身を尊格として立ち上げ、それを保持したまま「念誦を伴う禪定（四支念誦）」を実践し、それをより一層深い段階に進めたところに「念誦に依らない禪定 (bzlas brjod la mi ltos pa'i bsam gtan)」があるとする。この「念誦に依らない禪定」には、「火に住する禪定 (me la gnas pa'i bsam gtan)」－「音声に住する禪定 (sgra la gnas pa'i bsam gtan)」－「音声の後に解脱が与えられる禪定 (sgra mthar thar pa ster ba'i bsam gtan)」という三段階があるとしている。つまり、「念誦を伴う禪定（四支念誦）」をより深めた「念誦に依らない禪定」において「音声に住する禪定の念誦」が実践されるということである。ここでもやはり「六種本尊」を実修した上で「念誦に依らない禪定」に入り、火一音声に住する禪定を行うことが強調される¹⁰。

10 『大真言道菩提論』(Ota.6210,67a4-68b1)

この「念誦に依らない禪定」の「音声に住する禪定」についてツォンカパは『大真言道菩提論』（Ota.6210,68b3-69a6）で述べており、ケートアップジェが次の通り端的に示している¹¹。

rang lhar dsgoms pa'i thugs kar zla ba'i dkil 'khor gyi nang du rang 'dra'i lha'i sku
phra mo zhig bsgoms pa'i thugs kar gsal zhing 'bar ba mar me lta bu bsam zhing /
de'i nang du sngags kyi sgra grags par bsgom mo / 'di ni bzlas brjod dang bcas pa'i
skabs kyi yi ge'i sgra la dmigs pa dang mi 'dra ste / de shub bu dang yid bzlas gang
yin rung rang gis bzlas pa'I sgra la dmigs pa yin la / 'di ni rang gis bzlas pa mayin
mar me'i nang du sngags kyi sgra grag pa la iogs nas nyan pa lta bur dmigs pa ste /
…'di la dang po lha'i sku la sogs pa rim gyis gsal btab ste / de nas lha'i sku la sogs pa
gzhan rnams yid la mi byed par sgra 'ba' zhig la sems 'dzin pa yin la / (IBTS, p.196)

自身を本尊として修習し [その] 胸の月輪の中に、自身と等しい微細な本尊の
仏身を修習する。[そして、その仏身の] 胸に明らかに燃え立っている灯明のよ
うなものを観想する。その中に真言の音声聞こえると修習する。これは、念誦
を伴う [禪定の] 時の「文字の音声」を認識対象（所縁）とする [念誦] とは異なる。
それは、「ささやき（小声）」と「意の念誦」のいずれかで、念誦する音声
を認識対象（所縁）とするのだが、これは自身が念誦するのではなく、火の中に真

11 ツォンカパ、ケートアップジェの論を整理して図示すると以下の通りとなる。
（Ota.6210,52a6-67a4 / IBTS,p.140-203）

[所作タントラの実践方法]

A. 念誦を伴う禪定

1. 四支念誦の前行

2. 四支念誦の正行

a. 念誦の支分の禪定

(1) 自身 [に本尊] を [生起して] 修習して親近する方法→六種本尊

(2) 前方 [に本尊] を [生起して] 修習して親近する方法

b. それを保持して念誦をどのようになすべきか—正念誦

3. 四支念誦の結行

B. 念誦によらない禪定

1. 火に住する禪定

2. 音声に住する禪定

3. 音声の後に解脱が与えられる禪定

C. 親近に習熟して悉地を成就する方法

言の音声聞こえるのを傍らで聞くように認識するのである…最初は本尊の仏身などを順に観想し、その後は本尊の仏身など他の事柄を意識せず、ただ音声のみを心が捉える。

「自身を本尊として修習し…」と述べているように、六種本尊での我生起に基づいて四支念誦に入り、それからより一層深い段階の「念誦に依らない禪定」に入る。「火に住する禪定」を経て「音声に住する禪定」に入るのであるが、最初は念誦する音声を認識対象（所縁）としつつも、最終的にはそれさえも無所縁となり「ただ音声のみ心が捉える」と述べている点に特徴がある。このような解説は、イエーシェードルジェーとも共通するよう見受けられる。

また、ここでも「ささやき（小声）」や「意の念誦」という念誦法が登場するが、これらについては次項でみていく。

ここまで、「音声に住する禪定」についてイエーシェードルジェーとツォンカパ、ケートウツプジェの説をみてきた。イエーシェードルジェーについては、「音声に住する禪定」と三または四支念誦を同じ枠組みで捉えているような表現がみられるとともに、「音声に住する禪定」を実践しない場合は三または四支念誦をすすめるなど、それぞれ別個に修習する方法を示しているようにも見える。

一方、ツォンカパ、ケートウツプジェの説では四支念誦を深めた段階で「念誦に依らない禪定」に入り、そこで「音声に住する禪定」が実践されるとする。また、イエーシェードルジェーのように三支念誦は登場せず、四支念誦が示されるのみである。

以上のようなことから、「音声に住する禪定」についての捉え方がイエーシェードルジェーとツォンカパ、ケートウツプジェでは異なることがわかる。

3. 「金剛のこぼ（金剛語）」と「ささやき（小声）」の念誦

2.1 で示した通り、イエーシェードルジェーは「音声に住する禪定」を解説した後、念誦法には二種類あるとして、「金剛のこぼ（金剛語）」と「ささやき（小声）」という語を挙げている。

では、「金剛のこぼ（金剛語）」と「ささやき（小声）」とは何かという点であるが、ここよりも遡って六種本尊の解説の後に詳細が述べられている。

So dang mcu ni legs sbyar te / lce rtse ha cang mi bskod par / sgra spangs pa ni rdo
rje'i tshig / cho gak un la sbyar bar byo'o// shu bu'i bzlas brjod ni / 'di ltar bdag nyid
sngas kyi yi ge'don pa na / drung na 'dug pa sus kyang mi thos tsam du bya'o//
(Toh.2687,253b1-2)

歯と唇をきちんとそろえ、舌の先をあまり動かさずに、音声捨てて去ることが「金剛のこたば（金剛語）」である…「ささやき（小声）の念誦」とは、自身が真言の文字を唱えるとき、傍にいる誰にも [声が] 聞こえないように実践すべきである。

実は、これらの文言は『蘇悉地羯羅成就法略本』（Toh.3066,129b7-130a1）の一部とみられる。しかしながら、イェーシェードルジェーはこれらが引用であると明記していない。Buddhaguhya の『上禪定品』からの引用については明記しているにも関わらず、Varabodhi の『蘇悉地羯羅成就法略本』からの引用については明記を避けているようにも見える。イェーシェードルジェーは概ね Buddhaguhya の流派を支持しているものとみられるが、この二種類の念誦法については『蘇悉地羯羅成就法略本』の説明が自説と合致するために引用したのではないかと思われる。これに従うと、「金剛のこたば（金剛語）の念誦」は、音声捨てて去った状態、つまりは念誦の際に音声を出さない方法だとみられる。また、「ささやき（小声）の念誦」については、傍にいる人に聞こえないくらいの小声で実践するという意味で受け取れる。

また「ささやき（小声）」について、Buddhaguhya は『上禪定品広釈』（Toh.2670,19a4）で「ささやき（小声）とは、努力することなしに真言を読誦する方法である」と述べており、声を大きく出すことなく、力まずに真言を唱えること、という意味合いでこのような表現をしているものと推察される。イェーシェードルジェーのいう「金剛のこたば（金剛語）」という表現は見当たらず、「意の念誦」が挙げられている。先の IBTS p.196 でも、「ささやき（小声）」や「意の念誦」が挙げられているが、これは Buddhaguhya の説を採用しているためである。ツォンカパは四支念誦の観想法において「文字の色を所縁とする念誦」と「文字の音声をも縁とする念誦」という二種類を挙げ、その中で後者の「文字の音声をも縁とする念誦」に「ささやき（小声）」と「意の念誦」があると、

prāṇāyāma と関連づけて説明している¹²。これらの詳しい内容については、「音声に住する禪定」をより深めた「音声の後に解脱が与えられる禪定」の中で触れている¹³。まとめると「ささやき（小声）の念誦」は小声で誦えるもので、これに熟達し心が散乱しなくなったならば「意の念誦」に入るとする。「意の念誦」は声を発することなく意のみで念誦する方法であり、ささやき（小声）一意の念誦と粗大な行から微細な行へ進むとしている。

また、「金剛のことは（金剛語）」について、高田 [1978: 501] では『蘇悉地羯羅成就法略本』より「意の念誦」と同じであるとしている¹⁴。この通りであるならば、イエーシェードルジェーもツォンカパらも「音声に住する禪定の念誦」には二種類の念誦法があり、「ささやき（小声）の念誦」と「金剛のことは（金剛語）の念誦」（＝「意の念誦」）として一致していることになる。しかしながら、どのような枠組みで実践されるのかという点においては、「音声に住する禪定」と同じく、イエーシェードルジェーの方がはっきりとした設定にはなっておらず、ツォンカパらの時代に至るまでにどのように整理されていったのか、その過程について検討の余地がある。

4. まとめ

ここまで「六種本尊」を概観し、「音声に住する禪定」についてイエーシェードルジェーとツォンカパ、ケートアップジェの説をみてきた。「音声に住する禪定」の修習内容については、両者とも似通っている。しかし、どのような枠組み、または段階で「音声に住する禪定」を修習するのかについては相違がみられるようである。

イエーシェードルジェーについて、①の文脈においては「音声に住する禪定」の中に三・四支念誦が組み込まれているようにも読み取れる。また、③において「これ（音声に住する禪定）を実践しないならば」と述べた後、三・四支念誦についての解説がなされている。ここからイエーシェードルジェーは、「音声に住する禪定」と三支もしくは四支念誦については関連しているものの、別々に修習

12 『大真言道菩提論』(Ota.6210,64a4-64b6)

13 『大真言道菩提論』(Ota.6210,71b1-7)

14 『蘇悉地羯羅成就法略本』では「意の念誦」という用語もしくはそれに類する用例は見当たらなかった。また、「六種本尊」や「音声に住する禪定 [の念誦]」という用語についても併せて確認をしたが、見当たらなかった。

しても良いと考えていたのではないかと推測される。

ツォンカパ、ケートウツプジェの説では、「念誦を伴う禪定（四支念誦）」をより一層深めた段階に「念誦に依らない禪定」があるとしており、この「念誦に依らない禪定」には、「火に住する禪定」－「音声に住する禪定」－「音声の後に解脱が与えられる禪定」とする。「念誦を伴う禪定（四支念誦）」をしっかりと修習してから、次の「念誦に依らない禪定」に入り、その中で「音声に住する禪定」を修習するわけで、イエーシェードルジェーのように選択的な構成にはなっていない。

また、イエーシェードルジェーについては、ツォンカパらのように「念誦に依らない禪定」等の設定がされておらず、この注釈を読む限りにおいては、かなり大きな枠組みで「音声に住する禪定」を把握しているようである。六種本尊を修習し、そこで自身を本尊と立ち上げたまま念誦するのであるが、「音声に住する禪定」を実践するか三・四支念誦を実践するかは行者次第であるとも読める。さらに、テキストの中で度々「音声に住する禪定」について触れていることから、ツォンカパらのように一定の枠組みの中で実践するものではなく、重要な念誦法の一つとして複数回実践するものと考えていたのかもしれない。

関連して、両者が触れている「音声に住する禪定」に二種類の念誦法があるという点についても検討を行った。イエーシェードルジェーのいう「金剛のことは（金剛語）」は *Buddhaguhya* やツォンカパらでは「意の念誦法」になっている。内容的にはほぼ同じように受け取れるが、イエーシェードルジェーが意図的に「金剛のことは（金剛語）」という語を採用しているようにもみえ、今後の課題としたい。

「音声に住する禪定」およびその二種類の念誦法については、イエーシェードルジェーの時代にはまだ体系的に整理されてはいなかったものと推測され、ツォンカパらの時代に至るまでどのような過程を経ていったのか検討する必要があると思われる。また、時代だけではなく、流派ごとの設定として相違があったものともみられ、引き続き考察していきたい。

いずれの禪定に住するにしても「六種本尊」が基本となり、ここで明らかに自身を本尊として立ち上げることが肝心である。密教においては我生起を伴う本尊瑜伽が行法の中心である。そのため、この「六種本尊」やこれを入り口とした禪定や念誦法を理解していくことは重要であると考えており、今後もより詳しい考察を進めていきたい。

〈凡例〉

引用したチベット語の和訳について、本文および注で示す訳文に [] で括って語句を補い、言い換え等については () で括って示す。また、中略する場合は…で示す。

〈主な使用テキスト〉

[*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* 原典] Tib : Toh 750=949, Ota 406=574

[*Buddhaguhya*]

Ārya-vajravīdāraṇa-nāma-dhāraṇīṭkā-ratnābhāsvārā-nāma

Tib : Toh2680 , Ota3504 , 『中華大蔵経 丹珠爾』 36 卷 No.1587 (p.489-519)

[イエーシェードルジェー]

Vajravīdāraṇā-nāma-dhāraṇīpaṭalakramabhāṣyavṛttipradīpa-nāma

Tib:Toh.2687,Ota.3511, 『中華大蔵経 丹珠爾』 36 卷 No.1595 (p.695-764)

[ツォンカパ] 『真言道次第広論』 (Toh.5281,Ota.6210)

[ケートウツブジェ]

IBTS=F.D.Lessing & Alex Wayman ,Introduction to the Buddhist Tantric Systems.
India:Motilal Banarsidass Pub,1968

〈参照文献〉

斎藤保高 2013 『ツォンカパのチベット密教－『真言道次第広論』全十四品解説と第十二品「生起次第」和訳－』

酒井真典 1972 『大日経の成立に関する研究』国書刊行会

高田仁覚 1978 『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会

田村宗英 2016 「*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* における *Buddhaguhya* の解釈」『印度學仏教學研究』第 64 卷第 2 号

2020a 「*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* におけるイエーシェードルジェーの注釈と儀軌について」

『智山学報』第 69 輯

2020b「六種本尊について－*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* の注釈を中心に探る－」

『密教学研究』第 52 号

キーワード：*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī*、六種本尊、音声に住する禪定